

父の叱り方

土屋 賢二

どんなものでも叱られるとは限らない。叱られるのは、人間や犬ぐらいで、カメや金魚が叱られることはない。このことからわかるように、叱られるのは、自然のまま放っておくと手がつけられなくなる動物だけである。

わたしは子どものころ、父によく叱られていた。このことから、カメや金魚とは違うタイプだと思われることがわかる。母は一度も叱らなかつたから、もしかしたら違う見方をしていたかもしれない。妻はわ

たしをよく叱るから、わたしを金魚レベルだとは思っていないのだろうが、金魚以上だと思っているのか、金魚以下だと思っているのかは明らかでない。

父はわたしをよく叱つたが、愛情も惜しみなく注いでくれた。学校には毎朝自転車に乗せていってくれたし、病気になるまで徹夜で看病してくれた。近所の子がわたしをいじめたりすると、父はその子に仕返しをしてくれたし、わたしが幼稚園で、なかなかブランコに乗れないでいると、乗っている子をどかせて乗せてく

れた。教育学の立場からいうと、こういう愛情の注ぎ方は間違っているのかもしれないが、父がわたしの味方だということはよくわかった。

父の叱り方も、教育学の立場からすると間違っていないかもしれない。

1

よく、叱るときは怒ってはいけないといわれるが、父が叱るときは半端ではなかった。ふだん明るくて陽性の父が、顔色を変え、ものすごい剣幕で怒鳴りながらひっぱたくところを見ると、どう考えても激怒しているとは思えなかった。叱られるたびに、殺されるのではないかと思っただけだ。

叱られそうだと思ったときは、よく逃げ回ったが、もちろん逃げ切れるはずがない。トイレに逃げ込んで鍵をかけてもドアを破って引きずり出された。逃げる時、よけいに叱られるし、つかまって泣くと「泣くな」と言っただけだということはわかってい

たが、逃げないではいられなかったし、泣かずにはいられなかった。叱られることのない金魚や猫がうらやましかった。

だからわたしには、ワシントンが、桜の木を切ったことを、叱られるのを覚悟の上で告白したというエピソードがとても信じられなかった。叱られるくらいなら何でもできるはずだ。嘘をついてその場がしのげるなら嘘でも何でもついた方がいいとは思えなかった。むしろ正直に打ち明けたら、「善良ヅラして生意気なやつだ」と言っただけに叱られていたような気がする。ワシントンがわたしの家に生まれていたら、正直に告白したかどうか疑わしいと思う。

わたしは叱られるのが怖かったため、叱られるか嘘をつくかという選択を迫られれば、つねに嘘を選ぶようになった。さぞ嘘をつくのが上手になっただろうと思われるかもしれないが、嘘がバレるのが怖くて動揺するため、嘘をつくとすぐに見破られてしまい、おかげで、結局わたしは詐欺師にはならず、たんなる嘘つ

きになるだけですんだ。

いまでも、ドラマで親が冷静に叱っているのを見ると、うらやましいと思う。ああいうふうには叱られていたら、もつと悪いことをすることができたのと思う。

こんこんと説教するタイプの親もいるらしいが、わたしの親がそういうタイプでなくてよかつたような気もする。幼稚園のころ、わたしの足が細すぎるといつて風呂で父にひっぱたかれたことがあつたが、このときも問答無用だつた。こういうとき、説教するタイプの親なら、「お前なあ、人間として恥ずかしいことなんだ。足が細いということは」などと静かにさすのかもしれないが、そう説教されたら、怖がるわけにもいかず、わかつたふりをする以外にどうしたらいいのか困っていただろう。どんな理屈をつけても、どうせわかるはずがないのだ。

本気で殴られると、悪いことをしたということが百の理屈よりもはつきり実感できた。「悪いこと」とは、

叱られるようなことだ、と定義していたのだ。叱られるのがあまりにも怖かつたので、叱られないですむなら何でも我慢できると思つた。ただ、問題は、どうすれば叱られないですむかということだつた。

2

よく、気まぐれで叱つてはいけないといわれる。実際、原則を決めて叱らないと、子どもも犬も混乱するばかりで何も学習できない。犬のことはよく知らないが（犬もわたしのことを知らない）、規則に従つて行動する動物である。犬をしつけると、決まつた時間になると散歩を催促し、その通りにしないと怒るようになる。犬は規則に従う代わりに、人間にも規則に従うことを要求するのだ。

しかし、父はわたしを犬とは見ていなかった。どういう原則で叱っているのか、最後までわからなかつた。たとえば、父も一緒になつてふざけ合っているかと思えば、次の日には、ふざけ合おうとすると怒り、

わたしが将棋などで遊んでいるのを機嫌よく見ていたかと思うと、一時間後には「そんなくだらないことをするな」と言っただけで叱ったから、気まぐれで叱っているとしたか思えなかった。

父は「ゴミを道ばたに捨てるな」とか「他人に迷惑をかけるな」といった、ふつうの親が子どもに教えることがらについては、まったく無関心で、そういうことで叱られたことは一度もない。皮肉なことに、大人になってみると、「他人に迷惑をかけるな」と教えられて育った連中が、「他人に迷惑をかけるな」と教えられたことのないわたしに一方的に迷惑をかけているのだから、教育はわからないものである。

一貫して叱られたのは、「お前は根性がない」「競争心がない」といったことだけで、それ以外のことにについては見当がつかなかった。

たとえば、小学校の入学式で先生が話しているのをちゃんと聞いていなかったという理由でひっぱたかれると、わたしは社会の規則に従わなくてはいけないの

かと思ったが、町内の祭りで山車を引いていて帰りが遅くなったときは、団体行動に従ったという理由で叱られると、社会規則に従順に従う人間になってはいけないのかと思った。

いま考えると、父の態度は理解できるような気がする。人間というものは、一貫性のない動物である。意義深く思えたことが、次の日にはくだらないように思えたりするものだ。子どもにかける期待も、矛盾をはらんでいる。勉強してほしいと思いつつも、ガリ勉タイプにはなつてほしくないと思いつついる。社会の規則に従ってもらいたいと願いつつ、一方では規則にとらわれない自由な人間になつてくれることを期待する。一貫性のある人間というものをわたしは見たことがないが、父も、わたしに似て一貫性のない人間だっ



たから、子どもに一貫した態度をとれるわけがない。

ただ、当時のわたしは、たとえどんな原則で叱られているのがわかったとしても、どうすればいいのかわかるわけではなかった。たとえば、成績が悪いという理由で叱られたが、わたしは、漠然と、何かを改めなくてはならないんだろうなとは思ったが、当時は、勉強は家でするものではないと思っていたから、予習や復習の概念をもっておらず、宿題は一度もしたことがなかった。だからどうすれば成績が上がるのか、見当もつかなかった。父も具体的にどうしろとは指示しなかった。実際、父にとっては万事、結果がすべてで、努力したかどうかは関係がなかった。

競争心をもって、という点については一貫していたが、それでも学校では「人と争ってはいけない」と教えられたから、混乱するばかりだった。さいわい、競争心をもつにはどうすればいいのかわからなかった。

足が細いという点にいたっては、どうすればいいのか、見当もつかなかった。どんなものを食べれば太く

なるのかもわからなかった。親もたくさん食べればいいのかという程度の知識しかもっていなかった。

実際に社会に出てみると、予測通りにものごとが進むことはほとんどないことがわかった。どんなに気をつけて行動しても、たいてい予想もなかった問題を引き起こしてしまう。個人でも人類全体でも、問題を引き起こさないで行動するにはどうすればいいのか、子どものころのわたしと同じく、だれも知らない。

わたしはどうすれば叱られることなく過ごせるのか、わからないまま成長した。どんなことをしているもいつ雷が落ちるかかわからないと思っているから、慎重な人間になってもおかしくなかったが、軽率で落ち着きのない人間になった。どこかに落ち度があるのではないかと自信がもてず、すぐに反省する人間になった。原則通りに叱られて育った妻は、原則でしかものを考えない無反省な人間になり、いまではわたしを無原則に叱っている。

(お茶の水女子大学)